

1. 小児期各種腎疾患におけるリンパ球サブセットの検討

(腎センター小児科) 永田 道子・安尾美年子・川口 洋・伊藤 克己

今回私たちは、小児期各種腎疾患における末梢血リンパ球 subsets と病態との関連を検討した。ネフローゼ症候群の活動期に Leu 3u/2a 比 (Helper/Inducer/Suppressor/Cytotoxic cell) が他の疾患と比較して高く、病状の改善とともに低下する傾向がみられた。また、紫斑病性腎炎においても、病態の改善に伴ない、Leu 3u/2a 比の低下が認められた。一方、IgA 腎症、血尿(微少血尿および特発性腎出血)、巣状糸球体硬化症、SLE 腎症においては one spot の測定で、特定の病期のみを観察であったため、一定の傾向を導くことは困難であった。

今後、FACS を用いて、リンパ球の function, 及び局所での細胞動態の検討が必要と思われる。

2. 全身性アミロイドーシスの骨髓における免疫グロブリン産生細胞の検索

(第二病理) 豊田 充康・梶田 昭

材料および方法: AL アミロイドーシス 9 例 (うち多発性骨髓腫 3 例), AA アミロイドーシス 6 例の骨髓脱灰切片を用い、蛍光抗体間接法により、各種免疫グロブリン (IgG, IgA, IgM, IgD, κ free chain, λ free chain) の染色を行ない、免疫グロブリン分泌細胞の種類について定量的に検索した。

結果: AL では、それぞれ 3 例において IgG, IgA が著明に増加していた。AL では AA と比べ、light chain が、遙かに高値で、 λ あるいは κ のいずれかへの偏りが目立った。 κ/λ , heavy chain/light chain の比をそれぞれ縦軸、横軸にとると、15 例がおよそ 3 つの領域に分かれた。AA 6 例は heavy/light の比が 1.0 以上、 κ/λ の比は 1.0 を中心に分布する。AL 9 例は heavy/light の比がすべて 1 以下で、 κ 優位の領域 3 例 (AL₁)、 λ 優位の領域 6 例 (AL₂) に分かれた。AL₁ は多発性骨髓腫、AL₂ は原発性アミロイドーシスの例が主である。以上の結果は、今後症例を増して検討するさい、1 つの指標になりうると思われる。

3. 新生児単純ヘルペス感染症の 3 剖検例における蛍光抗体法による検索

(第 2 病理) 佐藤 昭人・梶田 昭

(実験動物中央施設) 金井 孝夫

新生児における単純ヘルペスウイルスの全身感染症の 3 剖検例について、蛍光抗体法による検索を行なっ

た。方法としては諸臓器のパラフィン切片を用い、間接蛍光抗体法で観察した。なお、一次抗体は東京大学医科学研究所作成の抗 I 型および抗 II 型単純ヘルペスウイルス抗体を使用した。

いずれも I 型ウイルス抗原の陽性像を示し、3 例に共通した陽性臓器は肝臓、副腎、脾臓、肺であり、とくに肝臓と副腎に、多数の陽性像が認められた。なお、3 例中 2 例は臓器から I 型ウイルスが分離されており、蛍光抗体法による結果と一致した。

通常の染色による組織所見では、明らかな核内封入体や壊死を認めない部分でも、蛍光抗体法では陽性所見が得られる場合も多く、この方法による検索は、ウイルス抗原の同定に欠かせないものであり、臓器内のウイルス抗原の分布の検索に、重要な役割を果たすものと考えられた。

4. 髄液中 Fibronectin の検討

(脳神経センター神経内科)

太田 宏平・小林 逸郎・

竹宮 敏子・丸山 勝一

目的: fibronectin は collagen, fibrin, heparin, 基底膜成分、細菌等への結合が知られ組織障害、組織修復に重要な役割を演じていると考えられ、我々は種々の神経疾患において髄液中の fibronectin の測定を試みた。

対象: 髄膜脳炎、多発性根神経炎、多発性硬化症、ALS, SCD 等の神経変性疾患、脳血管障害、頭痛等により精査の結果、異常を認められなかった患者対照の髄液で総計 171 検体について Behring 社製 Laser Nephrometer を用いて免疫比濁法で測定した。

結果: (1) 正常患者対照における髄液中 fibronectin の平均値 \pm SD は 0.07 ± 0.02 mg/dl であった。(2) 髄液中 Fibronectin は総蛋白と高い正の相関を示した。(3) 髄液中 Fibronectin は髄膜脳炎で高値を示した。(4) Fibronectin % (fibronectin/total protein) は髄膜脳炎で高く、多発性根神経炎では低値の傾向がみられた。

5. 溶血性尿毒症症候群治療後多形浸出性紅斑に合併した一過性低ガンマグロブリン血症

(小児科)

平野 幸子・渋谷 富雄・早川 武敏・

横田 和子・福山 幸夫

症例は 2 歳 4 カ月の男児。家族歴は異常なし。乳児期に易感染性なし。1984 年 11 月アメリカにて溶血性尿毒症症候群 (HUS) に罹患し、二次性脳梗塞を合併し